

学習成立の技法

「学級崩壊」という言葉が、流行語のようになったのは、今から5年も前の話です。

そういえば最近あまり聞かなくなったなあ、と思っていたので、状況は良くなったかということ、そうではなくむしろ逆のようです。

大規模校では、学年に1学級は崩壊しているそうです。

そして、その崩壊は、まず授業に現れています。

「授業崩壊」という新しい言葉まで飛び出しています。

そこで、「授業成立」について書こうと思ったのですが、「学習成立」という言葉の方がぴったりくるような気がします。

というのは、次のようなことを考えていただくとわかりやすいかと思います。

例えば、強面の大変厳しい指導をする先生がいるとします。

その先生の授業は、たち歩く子どももいなければ、私語をする子どもはいない。

ですから、授業成立はしているわけです。

しかし、子どもたちの学習は成立しているかということどうもそれは肯定しづらいですね。

そこで、私は授業成立ではなくて、「学習成立」という言葉を持ち出してきたわけです。

さて、学習を成立させるための技法、その一は、次のことです。

発問したら、ノートに書かせよ。

次のような授業をしばしば見かけます。

「そのときのごんの気持ちは、どんなだったかな」(発問の善し悪しは関係なく。無論最低の発問だが)

そうすると、幾人かの子どもは、叫ぶように答え、行儀のいい子はすっと手を挙げます。

教師は、挙手している子を見て、「これしかないのかあ」なんて促します。

そして、幾人かを指名して、その中から正当近いものへと収束させます。

さて、ここで考えてほしいのです。

学習に参加している子は、どの子たちで、学習からスポイルされている子は、どの子たちでしょう。

実は、こうした授業で学習を成立させているのは、ごく一部の子どもだけです。

むしろ、多くの子どもが学習に参加していないのです。

なぜなら、考えたくない子は考えるように追い込まれていないからです。

第二に、思考の早い瞬発力のある子にだけ発表の機会が与えられていて、それ以外の子は考えているうちに、答が確認されてしまっているからです。

これでは、学習に参加したくても参加できません。

では、個々ではどのような方法をとればより多くの学習を成立することができたのでしょうか。

それには、次のような指導言を繰り出すべきでした。

「ごんの気持ちはどうだったか、ノートに書いてご覧なさい」

つまり、次のような指示が必要だったのです。

発問 + ノート作業指示

その上で、期間巡視 発表という風にすれば良かったのです。